

## 恋と自然

青木生子

日本の古典和歌の中から恋と自然とを抜き取ったら、あとに何がいったい残るだろうか。そう思われるほど、これは重要な素材であり内容をなすものである。古今集以後の王朝和歌では、四季に分けられた自然と、それに恋とが欠くことのできない主要な部立になっており、更には源氏物語の大きな特色とみられる自然と人情とを融合させた名文も、こうした和歌世界の連続、展開の姿であることを思えば、万葉集における恋と自然とは、まさに古典文学のエッセンスの出発点を考えるようなことにすらなるわけである。

一方、今日の私どもの日常の周囲からは、自然界や季節感はい毎に失われてゆき、人間の恋は相も変わらず、というより今ほど大胆、自由な表現を得ている時代はないかみえて、微妙な心の動きや内面性の深さを逆に喪失しているような時、恋と自然との古典文学が、今の私どもにどうかかわっているのか、これ又問題の大きさに戸惑わざるを得ない。ともあれ、こうした点は、それぞれの自己の中で問うてもらふことにして、私は万葉集の中においてこの与えられたテーマを自分なりに考えてみたい。

—

周知のように万葉集には、雑歌、相聞、挽歌の三大部立があり、雑歌、相聞は挽歌に比べるかに歌数が多く、この二つは相匹敵している。雑歌は旅や自然を、相聞は恋を歌ったものを主内容としていこともいうまでもなく、恋

と自然はすでに万葉の中でも主要な和歌の素材内容である。

更に相聞歌はたとえば、巻十一、十二におけるように正述心緒と寄物陳思（譬喩は「物」が介在する意味で寄物陳思と同じである）とに分けられたり、巻八、十では相聞歌が四季に分類され、巻十ではこれが寄物によって更に細分されたりするのによつても、物（自然物）や季節が恋愛世界と深い関係にあるさまを想像できる。そして寄物陳思歌は相聞歌中正述心緒歌を凌駕するかにみえ、なかでもその表現方法の主流として、歌の前段に景物を示し後段でその景物に寄せて恋の心をうたう序歌がきわめて多数を占めている。この序歌は実は万葉集において雑歌や挽歌に僅少で、相聞歌に集中してあらわれている事実も注目され、要するに物に寄せて、しかも序詞を用いて思いを述べる発想法は、相聞歌の特色または常式であるといつてよいのである。かりに相聞歌を分類や形式の上からみても、このように自然との関連がいかに大きいかを知るめやすとなるが、歌そのものの実質をみると、正述心緒歌においても全く思ひだけをそのまま表す歌のみならず、そこには何らかの自然物が介入して歌われている場合が決して少なくない。

こんどは自然を詠じた歌の側に立つて考えてみると、たとえば雑歌は巻八、十におけるように四季に分類される他に、巻七、十ではこれが詠物によつて更に細分されている。相聞歌では物に寄せて思ひが詠出され、主となるのは思ひであるのに対し、雑歌では詠物となつて物（自然物）が主となることは自明に属するといえよう。しかしかく物が主眼であるといつても、何らかの心の発働なくして抒情詩としての和歌は成立し得ない。物が詠じられるところには、そこにある種の心が必ずや動いている。ただその現れ方がこの場合は、心が物の陰にひそめられているのであるが、物とともに心の働きが強くなるに従つて、寄物陳思的なものと区別できないような場合も生じてくる。事実、雑歌の詠物の中にも恋歌とみられる歌は少くないのである。

以上にみられるような、いわば物と心との区別や関連は、万葉編纂者の分類意識の投影であり、事実そうした表現内容をもつ歌が多数あつたことでもあるが、同時にそれは、自然（物）と恋（心）との関係を広く万葉全体の上から考える示唆にもなるであろう。つまりかかる特殊な分類編纂による歌に限らず、恋の歌に自然界が、自然の歌に恋の心が万葉ではいかにさまざまに関連し交錯して歌われているかということである。それはある意味で抒情詩なるものの普遍的性格とすらいえるものであるが、なお我が国の文学という意味での歴史的産物である万葉集の中に、これ

はいかなる具体相と、その意味をもっているかを、いささかながめわたしてみようと思う。

## 二

ところで万葉以前の上代歌謡にも恋と自然はもちろんよまれている。

八雲起つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を

ここでは、雲の印象は直ちに八重垣に走り、更に「妻ごみ」の熱情をふいと引き起こし、きわめて断片的な言葉の投出、繰返しによって強烈な情緒を盛上げている。群り出る雲の印象を述べると考えるには、あまりに垣に關すること  
が重きをなし、又妻ごめの愛情を中心とするには八重垣という外物に興味が放散しすぎている。かりにこれを恋の心の側からみれば、自己の恋愛感情を求心的にそれ自体十分に直叙し得ないところに、感覚に訴える外的形象を借り用いてくる原始的発想を出ていないものである。又自然は自然そのものとして人間の外に定立していない、いわば自然と人間との未分化的抱合があり、自然をとらえているかと思ふと、それが突如として恋の心に向つて飛躍しているのである。同じ上代歌謡でも

倭方に 西風吹きあげて 雲ばなれ 退き居りとも わが忘れめや

などになると、上句の雲の情景も下句の別離の情緒もそれぞれ十分に描出されながら、ここでは上句は下句の「退き」を引き出す序詞でもある。序詞は自然と人事（恋）との対立形式を基本的発想とする民謡様式から發展してきたものと考えられ、ここにもその跡はうかがえるが、この場合の序詞は、あたかも別れの折の實際の風景を想像せしめるような豊かな描写を伴い、恋愛感情とよく響き合つて、象徴的な効果すら生んでいる。「八雲起つ」の歌が集団の情緒を歌っているようなのに対し、これは民謡的な名残はあつても、歌自体は一人の内面の心でとらえられた恋愛抒情歌の性格を一層に帯びてきている。

恋愛感情はこうして主観的に醇化されつつ、万葉時代に入つてからの大方の恋の歌には、正述心緒風の歌に恋の背景や環境として自然風物が詠みこまれ、又かの序歌風の寄物陳思の恋歌の類が盛んに詠まれていくようになる。これを自然に対する態度からいうと、目にふれた自然物からひよいと恋の情意が飛び出してきたり、自然が人間と類似し

たものと考えられたような原始的な自然観は失せて、もう自然は人間の外部のもの、人間の背景として認められ、人間に親しまれるものとして享受されてゆくようになる。ここに自然詠や叙景歌が次第に成立をみせてくるわけであるが、なお自然と恋との関連の面から、まず集中で時代の古い舒明天皇作といわれる次の歌を取上げてみる。

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐宿にけらしも(八一五二)

いつも聞く鹿の鳴声を耳にしないのになんと気付いた作者は、今宵は妻を求めて寝てしまったのだな、と鹿によせる心の中に自身の欲情をもしつとりとこめていっている。自然(動物)と人間との渾融したこのような、愛のぬくもりとか、情感は、自然物を情意の表現とみる歌謡の世界には未だなかったもので、原始から抜け出たばかりの古代においてはのみ存在し得るものではなからうか。かの「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば」云々の歌(一一二)が、国見や国讃め歌の発想を基盤にしなが、大和国原の景やそれに感動する精神の美しさが現れ出た叙景歌であるのと、これはまさに同一作者たるべき性格を荷った相関的自然詠といつてよいであろう。自然物にこめられた恋情といつても、それがたとえば

吉名張の猪養の山に伏す鹿の妻呼ぶ声を聞くがともしさ(八一五六一)

秋萩のちりゆく見ればおほほしみ妻恋すらしさを鹿鳴くも(二〇二二五〇)

などになると、明らかに外物としての自然に自己の恋情をよみこむとか、自然物に人間的恋情を仕立ててみるといった、万葉でも後代的な自然愛好の姿となって盛んに歌われるのである。舒明の鹿の歌には、やはり何といつても、集中もつとも醇乎として古代的な自然と人間(恋)との関連をみるのである。

一方、万葉の恋愛が抒情詩として開花を遂げたとき、前にもふれたようにその恋情表現に自然界はさまざまな関連を帯びて詠出されている。

秋山の樹の下がくりゆく水の吾こそまめ御念よりは(二一九二・鏡王女)

君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く(四一四八八・額田王)

さきの葉はみ山もさやに乱げども吾は妹おもふ別れ来ぬれば(二一一三三・入麿)

第一首の胸に秘めたる溢れる思ひは、秋山の木の下を隠れ流れていく水量の多い流れを序にすることにより、すぐれ

て形象化され、第二首の待つ恋のあわれは、秋風によって一層にしみじみした美しい情趣を醸し出している。この額田王の歌は、風が人の来訪の前兆であることを歌う呪的な意味をもったものと解釈するむきもあるが、この歌がことさら秋の風でもあることによって、やはり新しい情詩にも通う情調になっている点を見逃せない。春秋の優劣を比較した歌の作者であれば、秋風にふれた恋情といった、当時にしては稀に新しい詩情が生れているとみてもよいのではないかと思う。第三首の人麿の別離歌も、上句の自然と下句の心情を述べて両者を「ども」で対照する形式をとっている点では、序歌に近い民謡様式を発想起原にもっとみることができ、ここではそれがむしろ内面の対比となつて、上句の笹山の乱れさやぎの中にあつてこれと抗して、一筋に妻への思いを募らせている抒情の強調効果になっているのを知るべきであろう。人麿の情熱は「妹が門見むなげけこの山」(二三)といったような神話的、呪的な自然の捉え方もあるが、内面に深まる心情世界には自然風物もこのような形象を結んで心情の背景をなし、又これと融合している場合のあることは、この歌のみに限らない。

### 三

いわば思慕の情の切なさが、正述心緒風に或いは寄物陳思風に自然風物を添えて以上のような秀歌を生んできた万葉前期の作に対して、万葉後期になると自然も恋愛も概して趣味的、愛好的、美的なものに近づいてきているのを否定できない。

万葉後期の人々は、天平文化の粹を誇る華麗な都の中で、自然や恋の歌をどれほど多く歌ったことであろう。彼らは四季折々の花鳥を自然の山野に賞したばかりではなく、自宅に庭園をつくりそれを愛好した。かつて自然のなかに広々と生きていた万葉人と違って、都会人となりつつある彼らにとって、自然はそこはかとなき情趣を誘うものであり、後世ほど繊細で巧緻ではないけれど花鳥風月的な自然観や季節感はずでに天平人の心に浸透していったのである。そのさまは家持の作や卷八、十における四季の歌などにふんだんに代表されており、これに関しては別に設けられている演題「万葉の四季」においておそらく詳細に述べられることであろう。

花鳥風月を愛好する歌がこのように多いのは、実は彼らが、文化の進んだ細やかな恋愛感情をいだいている詩人で

あつたからなのである。四季とりどりの奈良朝人の自然の歌も実質は恋の歌であるものが多い。彼らは

春がすみ山にたなびきおほほしく妹を相見て後恋ひむかも（二〇—一九〇九）  
と春の霞に慕情をかきたて、彼らにとつて

九月の時雨の雨の山霧のいぶせきわが胸誰を見ば息まむ（一〇—二二六三）

と晴れやらぬ恋の悩みに融け込むものは、秋の時雨であった。七夕の歌があれば流行したのは、彼ら文化人にとつて七夕趣味は初秋の恋情としてきわめて好みに適した詩情であつたからでもあらう。又、四季の推移、自然の変化は

春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでにあはぬ君かも（二〇—一九〇二）

わが屋戸のくず葉日に異に色づきぬ来まきぬ君は何情ぞも（二〇—二二九五）

のごとく、恋人の心の「うつろひ」、心変りを予感させた。古今集の「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかがとぞ思ふ」といった心が培養されていく地盤もすでにここにみられる。自然の変化にもなつて人の心もまた動く。この変化を敏感に感受しやすいものが、自然にあつては季節、人の心にあつては恋愛ではなからうか。そして季節のような微妙な変化と陰影のある自然物象は、恋する心の中でこそ最も接近しやすく、鋭敏にとらえられるべきもののである。こうした姿はおよそ普遍的なものらしく、現在の歌謡曲などでも低俗な感傷性ではあるが、恋に季節や自然はやはりつきもののように歌われている。

万葉では消えやすい露や霜、うつろいやすい草花などが、恋の切なく、又消え入らんばかりの慕情をかりたてている。

わが屋戸の夕かげ草の白露の消ぬがにもとおもほゆるかも（四—五九四）

秋萩のおきたる露の風吹きて落つる涙は留めかねつも（八—一六二七）

白露と秋の萩とは恋ひ乱れ別くことかたきわが情かも（二〇—二二七一）

朝露に咲きすさびたるつき草の日くたつなへに消ぬべく思ほゆ（二〇—二二八二）

集中、露や霜に「消ゆ」を関連させて歌う類型歌がきわめて多い中で、第一首は「夕かげ草の白露」とあるのによつて、夕暮の中にほのかな光を放ち今にも消え入ろうとするはかない露がひときわ印象づけられ、これを「わが屋戸」

の庭でじっと見つめている作者の姿態さえ感じさせつつ、身も心も消え果てそうな恋心をさながら一つに歌いあげている。第二首には、たおやかな萩の葉末においた透명한白露が、あるかなきかの秋風にほろりとこぼれゆくその淋しさ、空しさ、そこに恋の悲哀にしみじみ袖を濡らす人の露と紛う美しい涙が二重映しにされている。又第三首は、白露をおいた秋萩が風にまれ乱れ合っている風情のはかなさを歌って、その露と萩のともどももの美しさにどちらの方の人をも定めかねるわが恋心のあやしい乱れをそこに見出しているのである。第四首のごときは、美しい露とつき草の冷え冷えした感覚や、初秋の明るく淋しい光線を感じせしめ、それが撩乱たる恋の乱れに消え入らんとする人の心とまさに融け合っている状態である。かの前掲の、ぼうっとたちこめた春霞の中にいだかれたほのかに見た妹への慕情（一九〇九）、うっとおしく立ちこめた時雨の山霧によせる晴れやらぬ恋情の歌（二六三）なども、すべてこうした恋愛と自然との微妙な交錯、共鳴のもとに生れたものである。

これらの歌では、きわめて微妙な恋愛の情調、気分が、自然の感覚描写を借り用いてこそはじめて表わすことのできるような、自然との深い本質関連に及んでいるのに注目される。そこでは恋愛感情が自然情景や季節と相融合し、恋愛の気分状態が自然の中に融け込んでいるようでもあるし、逆に自然が恋の気分の中に影響、侵入してきているようでもある。これを普通、感情移入ともいい、かかる表現を象徴的表現ともいうことができよう。もっとも、自然描写による恋愛感情の象徴的表現といつても、譬喩的、観念的、あるいは智巧的装飾の分子も相当多く、おおむねこの要素を多少なりともつもものが多いのであるが、中にはここにみたような純一な気分情調の象徴にほとんど近いものが見出されるのである。心情状態の表現をどこまでも生命とする抒情詩の、ある極地の表現手法がかかる気分象徴であるとすれば、万葉の恋の歌もその表現技法において最高の域に達しているものがあることを認めてもよいであろう。

ところで、恋と自然との関係において、寄物陳思的な序詞が特に相聞歌に多いことについては、恋の気持をあらわにせず婉曲にするためとか、修辞や装飾の面白さによって相手の心をひくためであるという、実用性を以てこれを説明づけることも可能であろう。作者の意識にこれを全く認めないわけではないが、この見方はむしろ結果的にみた効果論であって、序詞の手法すべてをこれのみで蔽ってしまうことはできないと思う。自分の、いわくいいがたい気分

を序のような自然物象の気分で何とか表わそうとする、抒情の発想の内面意識からすれば、象徴的表現としてやはりみるべきもののあることを否定できない。

#### 四

次第に繊細、微妙になってきた万葉の恋愛感情が、これとともに成長をみた自然感情と深く結び合っている事實は、以後の王朝文学の世界を考える上に重大である。いまみてきたような自然は、特に恋愛感情に取り入れやすい身辺の親愛な動植物や天然現象であり、又それらの推移、変化する季節感においてとらえられている場合が多いわけである。本来の意味の自然からすれば、それは何らかの限定と変貌を遂げた自然であろう。一方恋愛内容そのものからいえば、かかる自然風物とともにある気分情趣は、本来の全人的感動の中心から幾分遠のいた恋愛でもある。自然と恋愛とは相互に浸透し融化し合つて、それぞれを優雅なものに仕立てながらそれぞれ本来の姿から次第に脱却しはじめていたのである。つまり恋愛はなまなましい切実な恋愛感動から美的な、ゆとりある男女の情となり、自然は都会的に洗練された感覚によって美的、嗜好的な対象になってきたことである。

闇夜ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや（八一―四五二）

この歌いぶりは、梅の花に照る月を愛するみやび心を無視しては恋の願いも叶えられぬかのような美的趣味の偏向を物語っている。

夕やみは路たづたづし月待ちて行かせ吾背子その間にも見む（四一七〇九）

のように、月の美しさのためでなく、月明りで恋人が無事に帰れるのを願ひ、月の出を待つしばしの間でも恋人をひきとめておこうとする純情を歌うのが万葉の恋であると同時に、先のような美的趣味をたてにとつて恨みや恋の歌もみえてくるのが、注目されねばならない。

来て見べき人もあらなくに吾家なる梅の早花散りぬともよし（一〇一―三三二八）

わが屋戸にさきたる梅を月夜よみ夕夕見せむ君をこそ待て（一〇一―三三四九）

花も月も見人あつてこそ美しい、それによつて恋人も来るといった歌は、もう王朝人の歌と何ら選ぶところがな



い。そして花にそえて歌を恋人に贈ることも盛んに行われ、自然風物はみやびな恋に欠くことのできない要素となつていくのである。

こうして奈良朝人の自然と結び付いた恋愛生活はゆるやかな傾斜を以て、次の王朝人のそれへとたどられてゆく。王朝の莊園貴族制が律令制社会の否定として生れたものではなく、むしろ連続的継承であつたことと、これはまさしく照応している姿なのである。

以上を以て、万葉集における恋と自然との関連をおおよそに見通したわけであるが、こうした世界からはみ出して異彩を放っているものに、東歌の恋と自然がある。東歌は、その恋が卒直で野性的な情緒であるとともに、その序詞などにあらわれている自然には、天平歌人の作におけるような静かな花鳥風月などがほとんど捉えられていず、生産生活に結び付いた自然が素材にとられている。

安波をろのをろ田に生はるたはみ蔓引かばぬるぬる吾を言な絶え（一四—三五〇一）

馬柵越し麦食む駒のはつはつに新膚触れし児ろし愛しも（一四—三五三七・或本の歌に曰く）

崩岸の上に駒をつなぎて危ほかど他妻児ろを息にわがする（一四—三五三九）

序詞に出てくる蔓草や馬は、彼らが日常の野良仕事でしばしば体験し目撃する自然物以外の何物でもない。それらと彼らの心の動きは発刺と通い合っている。野趣豊かな序詞の自然と人間の素肌の情欲とが相俟って、ここにみずみずしい歌を生んでいる。この自然は人間の外に定立された、生産と縁を切つた文学的自然ではなく、ここには生活しているものの自然と人間情欲との未分化的抱合があり、むしろ、上代歌謡のなかの古いものと思われる歌と血脈を同じくしているのがみられる。

東歌のこのような姿もあることが重視され、万葉における恋と自然の在り方は、かく一律でなく、さまざまな様態を蔵しているところに、今日的意義にふれあたる豊かなものが存在することを付言して、はなはだ粗末な話を終えることにする。（昭和四十四年七月六日上代文学夏期講座「恋と自然」講義要旨）